

通信教育 夏風景



お母さんの横で、坊やスヤスヤ

年一回の熱い再会

思いはさまざま、熱意は同じ

一般学生が夏休みに入った7月30日から3週間にわたって、中大多摩キャンパスで通信教育生のスクーリングが行われた。ことしも全国から公務員、教員、会社員、主婦たち、さまざまな約3千人が集まり、18歳から70歳台までが「やあ、しばらくです」の声を交わした。年に1度の「暑い顔合わせ」にキャンパスは賑わった。（学生記者＝真田季実子、裕実子）

現在、通信教育を実施している学部は法学部だけである。8号館をのぞいてみたら、講義にじつと耳を傾ける人で教室はほぼ満員。ヒソヒソ声で感想を聞こうにも、あまり熱心に聞いているので、「とても悪くて聞けない」状態。しばらくは、私たちも渡辺達徳先生の民法3（債権総論）を一緒に聴講した。

3限〜4限をフルに使っての授業だが、生徒は居眠りしたり、私語をはさむこともなく、緊張感がみなぎっている。「通教生（通信教育生の略）の方のなかには、かなり専門

的な意識をお持ちの方もいて、こちらで答えられないような質問をされます」と授業を終えた渡辺先生はおっしゃった。

通教生はスクーリングによって、30単位の取得が義務づけられる。卒業するには、3週間が勝負ということとなるだろう。5歳の息子を連れて名古屋からやってきたという女性は「すでに東京に2週間います。第1週目の水曜日に、この子が熱を出してしまったんです。その時はさすがに登校できませんでした」と、息子の頭を撫でながら話す。5歳の子供

にとって大教室で勉強するお母さんの隣で、何時間もおとなしくしているのは、さぞや辛かろうと思ったが、「いや、この子が大学についていくといったもんですから。離れているのも心配ですし……。日曜日には息子と2人で多摩動物公園に行ってきました」といった。

勉強の大切さ、 こちらが教わる

8月6日の夕方、通信教育の学生教職員ら関係者がヒルトップ4階のスイヒロで懇親会を開いた。ここで通教生の何人かにインタビューを試みた。

最初に話をうかがったのは、中央大学の近くに住む、すでに会社の定年を迎えた男性だった。「若いときは技術系を専攻し、仕事も技術系に進んだが、ある時、『脱三民法』（東大教授・東栄著）を読んで、自分の職場が機械と機械の間に立ち、その2つをつなげる仕事であるのと同様人間と人間の関係を規定するもの（法律）にひかれて、ずっと興味を持ち続けていました。私は大学をレジャー化しているんですよ」と、い

「そこまでして、なぜスクーリングを。なにか特別な理由や、目指している資格があるのですか」とうかがったら、そうではない。「法律は日常生活に関わることですからね。勉強したいと思って」。純粹な向学心。これは多くの通教生に通じるキーワードであった。

われた。その方にとって、大学はまさにレジャーそのものであるそうだ。地方から出てきて後輩の家に居候している、という女性は短大で非常勤講師をしている。今年3年目のスクーリングだ。「来たときは周りに刺激されてノリノリなんだけど、帰ったらやらなくなっちゃうのよ」と、舌を出して笑った。大学で憲法9条の質問を受けたことが、通信教育を始めるきっかけとなったそうだ。「家族がみんな協力的で、夫や親戚のバックアップ体制が確立しているからできるんです」

栃木県出身の自衛隊勤務の男性は今年で4回目。「テキストから先生の熱意が伝わってくるように感じる。



懇親会場も賑やかに



いただいた航空写真

勉強は全力投球であたっている」といい、このスクーリングが終わっても「毎日2時間は家で勉強している」と、一般学生顔負けの熱意だ。彼はことし2月に、航空整備の仕事で、中央大学の八王子キャンパスを撮影したと、その写真をくださった。とてもパワーフルな女性たちから話が聞けた。1人は大阪出身、もう1人は福岡出身。八王子のホテルの女性は、このスクーリングを受ける前は、カナダの大学で、環境工学を専攻していた。福岡の女性は「法

律知識の必要性を感じたことが何度もあったので、ボケ防止もかねて受講した」と語ってくれた。今回の取材を通じて知った、通教生の真剣でひたむきな眼差しや姿勢は忘れられない。そして全員が、私たちに勉強することの重要さを教えてくれているように感じ、さらには私たちに勉強に対する姿勢の問い直しを迫っているような気さえした。大学で余裕を持って学べるのは、限られたこの時間だけだ。それを心に書き留めて大学生活を過ごしたいと思った。